Title	「……私たちが長い間会えないでいることを大変寂しく思っています」：エーリヒ・フロム＝パウエル・ティリッヒ往復書簡及び関連書簡の解説と翻訳
Author(s)	竹渕，香織 深井，智朗
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.49, 2011.1：195-236
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2947
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「……私たちが長い間会えないでいることを大変寂しく思っています」

――エーリヒ・フロム＝パウル・ティリッヒ往復書簡及び関連書簡の解説と翻訳[1]

竹渕　香織・深井　智朗

第一部　解説――エーリヒ・フロムとパウル・ティリッヒ

はじめに

エーリヒ・フロムとパウル・ティリッヒとの間には、フランクフルトで出会い、共にアメリカに亡命し、そしてアメリカの市民権を得て、アメリカで亡くなるまで途切れることの無い知的交流が続いた。特にアメリカでエーリヒ・フロムが「宗教と心理学」の問題を取り扱い得る社会心理学者として、またパウル・ティリッヒが「宗教と心理学」の問題を取り扱い得る神学者として知られるようになった時に、ひとは両者の共通点のみならず、相違点に注目するようになり、両者がそれぞれの著作や書評などで相手に送る批判や評価に関心を持つようになった。[2]

しかし知的伝記は、両者の関係についてはそれほどに明瞭に語ってくれているわけではない。そのためにこれまで両者の関係についてはさまざまな憶測に基づく説明がなされている。たとえばよく知られたゲルハルト・P・ナップのフロム伝では「ふたりは親しい関係には進まなかった。預言者同志は、往々にして相手の内輪に入っては寛げないものなのである」[3]と両者の関係を説明している。しかしその際ナップはそのように判断した論拠を示しているわけではない。ナップの指摘は、両者のアメリカ亡命後の状況を説明した文章であるが、たとえば今回紹介する第一番目の資料が示していることは、むしろ両者の親密な知的交流がアメリカ時代に続いていたということである。この案内状からも明らかな通り、ティリッヒとフロムは一九四一年以来ティリッヒのアパートで毎月行われていた「コロンビア・ユニオン哲学グループ」のメンバーであり、またティリッヒが主催していた「ニューヨーク心理学グループ」のメンバーでもあった。前者の案内状の一枚がフロムの遺品の中に残されていた。毎月個人宅で行われていた研究会に出席していた両者が「相手の内輪に入って寛げない」状態であったとは判断しがたい。

さらに今回翻訳した三番目と四番目の手紙にあるように、フロムは妻の病気のために戦後一九四九年にメキシコに移住し、そこで職を得たが[4]、そこからフロムがティリッヒに送った手紙がハーバード大学アンドーヴァー神学図書館のティリッヒ文書の中に存在している。フロムはティリッヒの病気を心配し、またティリッヒの仕事を気遣い、さらには「長い間会うことができないことを寂しく思っている」と書いている。事実フロムはそのメキシコで彼が勤めた大学にティリッヒを招いて、客員教授として講義を委嘱しているし、ティリッヒが一九六〇年に日本を訪問した際に書いた長文の「日本旅行についての非公式レポート」はフロムの遺品の中にも見出される。このように両者の関係は決して親しくないものではなく、むしろ一般的に見て思想的な対立はあったとしても、また宗教を積極的に論じるか、否定的に論じるかの違いはあったにしても、毎月ティリッヒの自宅での研究会に参加し、客員教授として代理講義を依頼し、相互に病気を労わり合う関係はむしろ親密なものであったと判断すべきなのではないだろうか。このような関係の上に、ア

メリカ時代にそれぞれの著作において、相互に意識し合う議論や相互の批判が成立しているのである。[5]

本論ではこれまでの両者の関係を論じる際の情報の欠落をいくらかでも補うために、現在公開可能で、しかもこれまで未公開であった両者の間で交わされた書簡、及び関連する書簡の翻訳を行い、また、その解説を付した。今後フロムとティリッヒの思想の比較研究が心理学の側と神学の側とで実証的に進められるであろう。これらの書簡はそのための資料のひとつとして、関係者の了解のもとに公にされる。第一部の解説では、ドイツを去った後二人がアメリカで成功し、それぞれの著作や論文を意識して、批判や討論を公にするようになるまでの、両者の関係を概観し、第二部に、両者の知的交流を裏付ける資料となる書簡類の翻訳を掲載した。

1. 社会研究所時代以前のフロムとティリッヒ

ティリッヒとフロムとが最初に出会ったのは社会研究所時代であるが、両者の直接的ではなく、テクスト上での思想的な出会い、あるいは何らかの間接的な接触の予感が、それ以前のさまざまな証言の中に点在している。

一九〇〇年にフランクフルトに生まれたフロムは一九二三年から二九年までフランクフルトやハイデルベルクで学生時代を過ごしているが、この間にティリッヒが書いた文章の中にフロムに触れているものはない。この時代に両者の関係を示すような資料は何もなく、ただひとつティリッヒの一九六二年に書いた回顧的な文章の中にこの時代に触れたものがあり、その中でフロムの名前をあげているが、両者の具体的な交流を明らかにするものではない。[6]

フロムは正統派ユダヤ教徒の家庭に生まれ、法学や経済学を学んだ後、専門分野を変更しハイデルベルクのアルフレート・ヴェーバーのもとで博士論文を完成している。これは「ユダヤ教の戒律――ディアスポラ・ユダヤ教の社会

学」[7]というもので、一九八九年になってはじめて出版された。これは方法論的には文化社会学的な研究で、内容的にはハシディズムの擁護であったと言ってよいであろう。

博士論文完成前後のフロムは、ラビであったラヴィンコフのもとでヘブライ語諸原典の研究を進め、さらには一九二〇年に開校しフランツ・ローゼンツヴァイクがフランクフルトで責任を持っていた「自由ユダヤ学院」で学んでいる。これは一九二〇年から二五年頃まで彼のユダヤ人としてのアイデンティティー形成に強く影響を与えたシオニズム運動からの転換を意味している。ここでフロムはレオ・レーヴェンタールに出会い、マルティン・ブーバーの影響を受けた。またここでゲルショム・ショーレムやヴァルター・ベンヤミン、エルンスト・ジーモンやナッフム・グラツァーと知り合いになった。彼はさらにこの時代、後に彼の妻となるフリーダ・ライヒマンと出会い、精神分析学の影響を受けるようになった。そしてこのフリーダからさらにマルクス主義の影響を受けた。彼が後に精神分析医としての訓練を受けた「ベルリン精神分析研究・診療所」はまさにマルクス主義と精神分析との結合を目指すものであり、ユダヤ自由学院でフロムを教えたショーレムはフロムとベルリンで再会した時に彼が熱狂的なトロッキストになっていた、と証言しているほどである。[8]

フロムは社会研究所時代以前に既にショーレムやローゼンツヴァイクと知り合いになったのだが、彼らを介してフロムはティリッヒの思想に触れていた。[9]後にアドルノはベンヤミンにショーレムにはじめて会ったのはティリッヒの家であったと手紙に書いているが（一九三八年五月四日）、それは自由ユダヤ学院時代のことである。ティリッヒは一九六二年に書いた「回覧書簡」（Rundbrief）の中で、レオ・レーヴェンタールから紹介されフロムの名を知ったと書いている。[10]どちらとも後にフランクフルト社会研究所と関係を持つようになったわけである。しかしティリッヒはその回覧書簡の中では心理学者としてのフロムについて触れているのではなく、社会主義の問題を論じるコンテクストでその名を出しているわけである。またアードルフ・レーヴェとティリッヒとの関係は一九二〇年にベルリン大学で結成さ

れたベルリン・グループ、通称「カイロス・サークル」と称する宗教社会主義のサークルによって始まったことは資料的にも明らかであるが、フロムとの関係は具体的にどのようなものであったのかはもちろん記されていない。

それ故にこの時代の両者の関係は、相互に影響を与え合うというようなものでもなく、フロムがティリッヒの講義に出席したことはなかったことからすれば[11]、直接的な知的交流の始まりを社会研究所以前に求めることは困難であろう。しかし宗派的な伝統からさえ自由になったフロント世代のユダヤ人たちがティリッヒを高く評価していたことは周知の事実である。たとえばローゼンツヴァイクは、一九二〇年七月に、パウル・ティリッヒの論文集を従兄弟のハンス・エーレンベルクから譲り受けた時に、当時の恋人であったオイゲン・ローゼンストックの妻マルガリータ・ローゼンストック＝ホイシーに送った手紙の中で、「ベルリンの私講師にティリッヒという人がいます。この人はまさに将来のある人物、わが世代の兄弟です。……私が『救済の星』でやったことを彼は体系化しています。……彼の思想は述語の上に浮いている感じがしますが、他方で、真の言語という大地にしっかりと足を置いている感じがします」と述べ、さらには「ティリッヒこそ、私の『救済の星』での発言について何かコメントしてもらいたい唯一の哲学者です。私を理解できるひとはおそらく彼をおいていないでしょう」とまで述べている。もしローゼンツヴァイクとフロムとの関係がフロムのベルリン時代に遡るのであれば、ティリッヒへの評価がフロムに伝わっていないということも逆に考えにくいことである。しかしそれはそれ以上のことではない。それ故にフロムはティリッヒを評価する同世代のユダヤ人知識人グループの中にいたと考えるのは妥当であるが、ゴタード・ブースのように両者の関係をベルリン時代にあると具体的な証言なしに断定する必要はないであろう[12]。

2. 社会研究所時代のフロムとティリッヒ

以上のような理由から、両者がはじめて直接的に、内容のある出会いを経験するのはフランクフルト時代であり、その場所がフランクフルト社会研究所であったと考えるのが妥当であろう。しかし実はこの時代の両者の直接的な交流を示す資料も決して多くはない。両者がフランクフルト大学及び社会研究所にまったく同時期に在職していたのであるから、両者の直接的な関係を示す資料がないことのほうが不思議なことである。

パウル・ティリッヒがドレスデンからフランクフルトに移ったのは一九二九年のことである。ティリッヒは、一九二五年にはリヒャルト・クローナーの勧めでドレスデン工科大学の宗教と社会哲学の正教授に就任した。ドレスデンという大都市に魅力を感じてはいたものの、総合大学ではないドレスデンで、必ずしも哲学や神学を専攻するのではない学生に神学者が哲学を教えることに限界を感じていたティリッヒは、カント派の論理学者ハンス・コルネリウスの後任としてフランクフルト大学の哲学ならびに社会教育学の正教授に転任している[13]。

彼はここでは大学の教授陣の中で唯一の神学者であり、「世俗的な環境で哲学を教える神学者」という一般的には考えられないような立場にあった。しかしそれは彼の学問的な性格をよく表しているし、この時代「神学」という学問がドイツ社会において担っていた役割をよく示している、何よりも彼自身にとって「やりがい」のある仕事であったに違いない。彼は「神学者の中の哲学者、哲学者の中の神学者」と呼ばれ、また口悪い人々からはユダヤ人の多いフランクフルトの哲学部でキリスト教神学者が哲学を教えるのであるから、彼は「ユダヤ人たちの中のパウロ（Paulは聖書のパウロのドイツ語名である）」とさえ呼ばれた。

ティリッヒがフランクフルトに招かれた理由は、当時のドイツのプロテスタント神学が置かれていた学問的な状況に基づくものである。神学部はその時代もっとも多くの学生を持つ学部のひとつであった。それは神学部が聖職者のみならず、公立学校で必修であった宗教教育のための教師を養成していたからでる。またこの時代、神学は教会や特定の宗教的な思想の中に閉じこもるようなものではなく、国民教会制度が伝統的に確立されており、公立学校で宗派に基づく宗教教育が必修であり、神学部が公立大学に存在していたので、神学部の卒業生は、聖職者や宗教教育の専門家になるだけではなく、かなりの人数が官吏となって地方行政に関わっていたのである。このような神学部の置かれた社会的状況が神学者たちをキリスト教内部だけに留め置くのではなく、神学者としてキリスト教会の外の社会で仕事をすることを可能にしていたのである。

ティリッヒは他方で、神学と哲学との両方の学位を持ち、神学的な問題を哲学的に説明することができたし、哲学者たちに、神学と結び付いてしまったプラトン以後のヨーロッパの哲学の深層構造を説明できた。その意味では、彼はドイツ観念論及びドイツ・ロマンティークの最後の生き残りと言っても過言ではないであろう。彼はキリスト教化した哲学を理解するためにももっとも適切な人物と哲学部でみなされていたのである。そして彼自身、決して神学を捨てたり、神学の伝統的な体系を壊すことはせず、ただ神学的な概念を、今日の知的状況の中で説明することに長けていた。それがティリッヒと他の学問分野の人々とを結び付けることに役立ったのである。

フランクフルトで彼はテオドール・ヴィーゼングルント（すなわち後のアドルノ）の指導教授であり（アドルノはティリッヒのもとでキェルケゴールの美学についての教授資格論文を書いている）、また社会学者のマックス・ホルクハイマーを哲学・社会学の講座の教授に据えるために努力し、後に彼がフランクフルトの社会研究所の所長になることを助けた。それは当時すでにユダヤ人を援助することが危険になっていた状況においてなされたことである。またこのフランクフルトでの哲学教授の仕事が、ティリッヒとハンナ・アーレントの最初の夫ギュンター・シュテルンとを結び

付けることになった。このフランクフルトでのユダヤ人知識人たちとのコネクションの中にフロムもいたのである。

さて、他方でエーリヒ・フロムがベルリンからフランクフルトに戻り、フランクフルト社会研究所の建物の中に開設されたフランクフルト精神分析研究所の所員になったのも、ティリッヒがフランクフルトに着任したのと同じ一九二九年であった。フロムがフランクフルトに呼ばれたのは、おそらく精神分析研究所の初代所長となったカール・ランダウアーがフロムに精神分析学の手ほどきをしたひとりだったからであろう。その後フロムは精神分析研究所の廃止が決まった一九三二年（実際の廃止は翌年の一九三三年であった）になって、正式に社会研究所に社会心理学部門の責任者として異動してきた。

この人事にもティリッヒが関与している。社会研究所とフランクフルト大学の人事は複雑な契約によって成り立っていた。研究所は一九二三年二月三日、プロイセン州文部省と社会研究協会（Gesellschaft für Sozialforschung）との契約のもとに正式に発足している。この契約によれば、研究所の母体となる社会研究協会は、大学のために、経済・社会学部に正教授のポストをひとつ設置するための基金を提供することになっていた。それに対して大学は研究所との協議の上で招聘することになるこの教授を研究所の所長兼任とすることを認めた。それによって研究所は大学からは相対的に独立しているが、しかしアカデミックな機関としての地位を確立することができたのである。

翌年六月二二日には大学キャンパスの側のヴィクトリア・アレー一七番にフランツ・レックスの設計した地上五階建ての研究所の建物が完成した。そこには座席が三六ある読書室、一六の研究室、一〇〇人が着席できる四つの講義室と演習室、七万五千冊の書物が収納できる図書館が設置されていた。初代所長のグリューネンベルクは竣工を記念した講演の中で、ドイツの学問研究の伝統の中にあった、大学に対するアカデミーの歴史的意義について強調した。

さて、一九三二年にクルト・リーツラーとティリッヒ、そしてフリードリヒ・ポロックとの協議によって、社会研究所の所長にマックス・ホルクハイマーが推薦された時、社会研究所は財政上は新しい負担を負うことになったが、新た

な発展をとげることにもなった。ホルクハイマーの教授資格は哲学なので、経済・社会学部の教授として招聘することはできなかったために、社会研究所は大学と追加契約を行い、哲学部にも講座設置のための基金を提供することになった。さらに研究所と大学との関係が密接になったことで、大学は研究所の二階と三階の教室研究室を大学の講義や演習、また研究所に席を置かない教授の研究室として借用することになった。そのための追加契約も行われ、大学は研究所に対して建物の管理費の一部を支払うことにもなった。

ホルクハイマーの時代、研究所は新しいエートスによって支配されるようになった。その象徴が『社会研究年誌』の創刊であろう。それは研究所のそれ以後の研究の方針の明示であったと言ってよい。それはいわゆるマルクス－レーニン主義に対する「西欧マルクス主義」の伝統の明確化であり、さらにはマルクス主義の問題意識と精神分析という二つの柱であった。

その際ホルクハイマーが大学の教授を兼任することになったので、その後正式に社会研究所の所員（生涯年金の権利を含む）となったのがエーリヒ・フロムであり、フランクフルト社会研究所がこの人事に際し大学側に提出した推薦、及び報告書類に、大学を代表してサインをしたのは学部長としてのパウル・ティリッヒであった。

この人事はフロムの人生を大きく変えたと言っても過言ではない。もちろんフロムは、精神分析研究所の所員時代から、非公式に同じ建物の中にある社会研究所の研究に参加していたが、今やフロムはホルクハイマー体制のもとで新しく再構築されようとしていたこの研究所のグランドデザインの設計に関わるようになったのである。

学位取得後のフロムが精神分析への関心を強く持つようになり、それが同時にマルクス主義への関心と重なっていたことはよく知られていることである。その背後には彼の最初の妻となったフリーダ・ライヒマンからの影響があったとことも既に指摘した通りである。フロムがフロイト派の雑誌とみなされている『イマゴ』に掲載した彼の安息日論は明らかにタブーの起源というフロイト的な分析方法が駆使されているし、それが労働問題と結び付けられている。

フランクフルト社会研究所の初期批判理論の構造設計を試みたホルクハイマーが、そのグランドデザインを任せたひとりがフロムであった。フランクフルト社会研究所の初期批判理論の形成に精神分析とマルクスの思想とが重要な役割を果たしているが、その後のアドルノやマルクーゼとフロムとのこの点をめぐっての対立や論争を考えるならば、この段階でフロムが果たした役割は今日改めて検討してみなければならないであろう。そしてこの点こそティリッヒとフロムとを思想的に結び付けていた点でもあった。

さてフロムは精神分析研究所から社会研究所に正式に移動してから、彼の提案したグランドデザインに基づいた研究を矢継ぎ早に展開している。一九三二年に新しい編集方針のもとに改名、再出版された『社会研究雑誌』に「分析的社会心理学の方法と課題について――精神分析と史的唯物論」という有名な論文を掲載している。また研究所の実質的なスポンサーであったヘルマン・ヴァイルが主導し、実質的にはフロムが担当した「ドイツ労働者の意識調査」は政治的イデオロギーとパーソナリティーとの関連についての大規模な実証研究で、理論仮説とアンケート調査の分析によるものであった。

この時代のフロムとティリッヒとを結び付けているのは、フランクフルト社会研究所という「場所」と、マルクスの思想と精神分析とを結び付けるという批判理論の「方法」であろう。

「場所」については、ティリッヒがフランクフルトで主催していた、「小さな集まり」（Kränzchen）が重要であろう。これはティリッヒがどの時代にも行っていた今日の言葉で言えば「学際的討論会」で、この会合の通常の回覧状の送付先はホルクハイマー、アドルノ、レオ・レーヴェンタール、フリードリヒ・ポロックであったが、討論の要旨を記録したメモによれば[14]、不定期の参加者の中には、心理学者としてはフロムとマックス・ヴェルトハイマーが、社会学者としてはヘルベルト・マルクーゼとカール・マンハイムなどがいた。

「方法」についてはマルクス主義と心理学との結合が重要であろう。この点ではフランクフルト学派のマルクス解釈

とも関係しているのであるが、ヴァイマール期のマルクス主義とは、第一次世界大戦前のいわゆる「教条的マルクス主義の正統的諸潮流の解体」[15]のプロセスの中で、「西欧型マルクス主義」、「パラ・マルクス主義」、「マルクス主義的ヒューマニズム」として知られ、マーティン・ジョイによれば、「西側でも東側でもマルクス主義の遺産の公的管理人によってすぐさま破門を宣言された」ものである。

フランクフルト学派が公式にそのように受け取っていたかどうかは別として、ティリッヒとフロムが共に受け取ったマルクス主義の主要な内容とは二〇年代後半におけるマルクスの初期草稿の発見に基づくマルクス主義、とりわけ広義の人間学であったと言ってよいであろう。

ティリッヒがベルリン時代に参加した「カイロス」グループはギュンター・デーンとカール・メニッケの指導のもとに成立したグループで、ティリッヒの他にアードルフ・レーヴェ、エドゥアルト・ハイマン、アレクサンダー・シュストゥ、アーノルト・ヴォルファースなどがいた。これはジークムント・シュルツの労働者支援運動への共鳴から始まったもので、教会内における多様な労働者問題についての研究会であった。

彼らの多くは、第一次大戦前に、ヴィルヘルム帝政期という権威主義的な「父の時代」に反発した「フロント世代」であり、その政治的、思想的な破壊を目指していたが、それを果たすことはできず、しかし第一次世界大戦によってそれらが完全に破壊されてしまったことを認識していた。そして封建制や帝政、あるいはラインラントの資本主義や社会階層の厳格な区別などが復興することに対して批判的であった。そのために、政治的保守主義や社会の伝統を隠れ蓑にして「責任ある社会的、政治的行動をとろうとしないドイツ・ルター派教会を強く批判する」ようになったのである。また他方であまりにも単純化され、ユートピア化されたマルクス主義やボルシェヴィキの唱えるプロレタリア独裁の不可避性などの主張にも同調しなかったし、神の国の地上での建設を説く宗教社会主義にも賛成しなかった。彼らがマルクス主義から影響を受けたとすれば、それはマルクス主義をひとつの歴史哲学として解釈し、現代の批判理論として用

いるということであった。カール・メニッケの編集によって一九二六年まで刊行された『宗教社会主義雑誌』はこのグループがベルリンの政治学研究所を通して発行していたものである。

この時代ティリッヒが念頭においていたのは、グスタフ・ランダウアーのロマン主義的・アナーキズム的社会主義、あるいは分権・契約的なアナーキズム（föderalistische Anarchismus）であったと言ってよいであろう。ランダウアーはブーバーにも深い影響を与えた人物であるが、ドイツ・ロマン主義と初期フランス社会主義との結合を考えていたティリッヒは「われわれが崇拝するのは国家ではなく精神である」というランダウアーの考えに共鳴したのであろう。

フロムもまたこのランダウアーの影響をマルティン・ブーバーを通して受けている。それは特に一九二〇年代以降フロムが当時の自由ユダヤ学院でブーバーやローゼンツヴァイクと交流を持つようになって以来のことである。しかしフロムがランダウアーから受けた影響は、ティリッヒと同じパースペクティヴであったかどうかは疑問である。なぜならフロムのマルクス主義は、社会批判や世代論、あるいは歴史哲学的革命論ではなく、人間論であり、フロムは社会分析の出発点としての哲学的人間学の必要性を後に考えるようになったからである。

またティリッヒはこの時代、ベルリン時代から関心を持ち続けていた精神分析や心理学への興味を拡大していく。とりわけティリッヒは再婚したハンナの妹マリー＝ルイーゼ・ヴェルナーがベルリンで学んだ精神分析家であったこともあり、大きな影響を受けている。ヴェルナーはティリッヒに「デモーニッシュなものの創造性」という考えを提供し、ティリッヒは彼の哲学上の師でもあったフリッツ・メディクスとともにシェリングの解釈を通して、「神それ自体の中に含まれる非合理的な可能性としてのデモーニッシュなもの」という考え方を展開するようになった。

もっともこの時代のティリッヒの心理学への関心とフロムのそれとが単純に重なると言うことはできない。フロイトの影響を受けたフロムと、アデマール・ゲルプやマックス・ヴェルトハイマーと共同研究会を定期的に行いゲシュタルト心理学の影響を強く受けたティリッヒとでは問題意識が食い違っていた可能性が大いにある。しかしフロムや社会研

究所のマルクス主義と精神分析との結合という構想をティリッヒは理解することができたし、ティリッヒは事実大学におけるフランクフルト研究所の擁護者であり、ホルクハイマーやアドルノとの密接な交流はこの時代、そして一九三〇年代に社会研究所がスイスに、そして最終的にはアメリカに亡命してからも続いているのである。ところがここでも二人の交流についての伝記的な情報は沈黙している。

3. アメリカ時代のティリッヒとフロム

今日両者の知的交流の内容が公式の記録として確認できるのは、両者のアメリカ亡命時代以後のことである。ティリッヒは一九三三年四月にナチスによって停職処分となり、一一月にはアメリカに亡命し、コロンビア大学とユニオン神学校に迎えられ、その後はハーバード大学とシカゴ大学を経て、最後にはニューヨークの新社会学研究大学院で教える招聘を受け、しかしその約束を果たせずに亡くなっている。ティリッヒは英語で思索し講演することに生涯苦労したが、ドイツで構築した思想をアメリカの知的マーケットで上手に商品化した彼はドイツからの亡命知識人としては稀に見る成功をおさめたひとりであった。彼がドイツからアメリカに持ち込んだ思想的商品こそ心理学であった。そしてそれはフロムとの新しい対話を引き出すことになったのである。またティリッヒは論争を続けたが、フランクフルト学派の人々との交流を生涯続けた。

他方フロムは、翌年一九三四年にジュネーヴを経て、アメリカに亡命し、コロンビア大学で教える傍ら、精神分析医として開業している。英語の優れた能力を持っていたフロムもアメリカで成功を得、その書物はドイツ時代からは予想できないほどの注目を集め、広く読まれるようになった。ただし彼は有名になったマルクーゼとの論争や、アドルノと

の決裂に表れ出ているように、アメリカではフランクフルト学派の人々とは疎遠になり（しかしフロムはアメリカに亡命後も正式な社会研究所の所員として報酬を受け取り、年金を受け取る権利も持っていた）、思想的にも個人的にも関係は断絶し、社会研究所からは正式に離脱した。しかしそのフロムが生涯交流を持ち続けたのがティリッヒであった。

既に述べた通り、ティリッヒとフロムの交流関係を示す資料は、アメリカ亡命後明らかに増加している。その理由のひとつは、亡命知識人たちの交流が限られた範囲でなされていたこと、あるいはニューヨークの知識人たちのネットワークが密接であったことなどに求められるかもしれない。そのことを示す第一の資料が、今回紹介する資料に収録された第一の書簡である。それはティリッヒの自宅で一九四〇年以後一九四六年頃まで毎月行われていた月例集会の案内である。集会は常にティリッヒのアパートで開催され、食事を用意し、連絡・調整役をしていたのはティリッヒの妻、ハンナ・ティリッヒであった。この会にはフロムの他に、カレン・ホルナイ、ルース・ベネディクト、医師でティリッヒがユニオンの学生たちを紹介していたゴタード・ブース、シウォード・ヒルトナー、ウェイン・オーツ、ロロ・メイ、ディヴィット・E・ロバーツ、フランシス・ウィッケスなどが参加していた。

またティリッヒはドイツからの移住者を援助する会の代表者として、知識人の就職と英語の研修の斡旋を引き受けていた。その中のひとつの分野として、ドイツ系の精神分析医や心理学者たちがケース・ワーカーとして働くことができるように、さまざまなネットワークを駆使していたが、そのために心理学や医学の分野では特にフロムと密接な協力をしていた形跡がある。本論に収録した二番目の書簡はその資料でもある。

さらにその後もティリッヒは一九四九年以後メキシコに移住し、メキシコ国立自治大学で精神分析学を教え、また精神分析医の育成に携わるようになったフロムとも交流を続けている。フロムはフンクによれば「一九五一年からメキシコ国立自治大学の医学部定員外教授としての地位を得て、〈メキシコ精神分析研究グループ〉の養成ができるようになった。このコースは一九五六年まで続いた。そしてフロムは同時に教育分析家として、理論と臨床のゼミナールの指

導者として、また指導分析家として、必要とされた」のである。フロムは一九六五年までこの地位にあり、引退している。その間に妻は亡くなり、再婚している。また一九五七年から六一年まではミシガン州立大学で、一九六二年以後はニューヨーク大学の教授も兼任していた。

フロムはこの多忙な教育の仕事を「何もかも自分でやってしまわないために、……ニューヨークから時折応援を得た」。その中には「フロムがフランクフルト時代から知っていた神学者のパウル・ティリッヒがいた」[16]のである。W・パウクはこの学問的支援のことを、二人は「ある時ともにメキシコで休暇を過ごした」と記しているが、事情はそうではないであろう。そしてこの事実は両者は学問的に、あるいは教育において相互に助け合うことができる関係にあったということを示しているのであろう。

さらに今回掲載した第三、第四の手紙は、レター・ヘッドが示しているように、フロムがメキシコから送った手紙であり、そこからはティリッヒ夫妻とフロム夫妻とが家族包みの付き合いをしていたことが理解できる。フロムはティリッヒの病気を気遣い、ティリッヒのドイツ語全集の出版を喜んでいるのである。このような両者のアメリカでの関係をさらに裏付けるのは、ティリッヒの長男で、後に精神分析医となり、ハワイ大学で教えたルネ・ティリッヒの証言であろう。[17]

第三の点は、今回収録した関連書簡、すなわちティリッヒにフロムの著作を解説するように依頼する出版編集者の手紙と、それに対するティリッヒの応答であろう（書簡五と六）。そのことはフロムの著作に対するコメントをティリッヒが書くことが意味を持っていると考える編集者が存在していたということであり、文面から読み取れることはティリッヒがそれを書く必然性ということであろう。両者はそれぞれの思想内容、とりわけ精神分析に関する諸問題、宗教と精神分析との関係、さらには批判理論としての精神分析についての意見において比較されたり、また相互に参照することが意味のある存在して、また相互に引用し、批判し合う学者として一般にも、そして何よりも相互にそのように考

える関係にあったということであろう。

それ故に、続く二つの節では、このような書簡が生まれた背後にある、両者の思想的な関係の見取り図を示しておきたいと思う。それはティリッヒの仕事におけるフロム、フロムの仕事におけるティリッヒについてである。

ところでヴィルヘルム・パウクはアメリカ時代のティリッヒについて次のように書いている。「一九五〇年代になると、アメリカでは実存的心理分析（現存在分析）が脚光を浴び、キェルケゴールの不安の概念やフロイトの『リビドー』（根源的欲求）の概念が見直されるようになった。長い間育んできたフロイトへの関心が甦り、ティリッヒの関心は社会主義から魂の癒しへと移行し、カレン・ホーナイ、エーリッヒ・フロム、ロロ・メイと親交を結んだ」[18]。これは事実の一面しか語っていないであろう。ティリッヒは社会主義の問題から精神分析に移行したのではなく、ドイツ時代からアメリカ亡命後まで、精神分析と社会主義的な問題意識との結合に関心を持っていたのであり、その点でドイツ時代以来フロムと問題意識を共有していたのであり、アメリカ亡命後に、精神分析への興味を持ちフロムと「親交を結んだ」のではないのである。

4. ティリッヒにおけるフロム

さてティリッヒがフロムの仕事の内容に具体的に言及し、あるいは引用、批判をしているテキストということになれば、実はそれはフランクフルト時代に遡る。ティリッヒがその著作の中でフロムに触れている個所は「symbioticな愛に関する言及意外はほとんどない」、などということはない。具体的には一九三三年にポツダムで出版された『社会主義的決断』の中で、フロムの『社会研究雑誌』に掲載された「分析的社会心理学の方法と課題」という論文を引用し

て、[19]精神分析と社会主義との結合の問題、精神分析の政治的領域への適応という問題に触れている。[20]

この引用とフロムの方法論の検討は重要な課題である。なぜならティリッヒが考えている社会主義、あるいは社会批判、そしてティリッヒの歴史哲学におけるフロムの影響や批判点をそこに見ることができるからである。またそれはティリッヒが社会研究所の批判理論とどの程度の親近性を持ち、また異なっていたのかを確認するためには重要なことである。そしてまたティリッヒとフロムとの学問的交流関係が、単なる心理分析の問題ではなく、実は最初から批判理論と歴史哲学という点においてなされていたということを明らかにしている。この問題群をめぐって、既に述べた通り一九三〇年代にティリッヒとフロム、そしてブーバーとショーレムとが同じ舞台に立っているのである。

『社会主義的決断』はその内容の故にティリッヒがフランクフルト大学での教授職を奪われ、アメリカへと亡命せざるを得なくなる状況を生み出した書物であり、出版直後にナチスのブラックリストに入れられた。ティリッヒはこの書物の中で、社会主義がブルジョア的人間観を取り入れたことで、ドイツの社会主義がエロス的なものや献身的精神を評価することができなくなっており、その結果これらのものを大衆の中に形成することができるシンボリックで強力な人格を持った人物を持つことができなくなり、それが逆に大衆の強い不満を生み出している原因になっていると述べている。すなわち「社会主義がブルジョア的人間観を取り入れて、人間の像から『中間』概念を排除したことにより、それがカリスマ的人格の過小評価、別の言葉で言えば、理性的形式とか理性的立場とは完全に違って、その存在力と精神活動力でもって大衆に確信の力を与えるような人格を、あまり高く考えないという事態が起こっている」[21]のだとティリッヒは分析した。

この検討においてティリッヒはヘンドリック・デ・マンの社会心理学を引用し、この問題を取り扱う際に実証主義的な人間心理学や社会心理学を用いることは妥当ではないと述べている。そして「社会主義が人間観において解決しがたい内的矛盾をはらむという事実は、それが誤った心理学を採用したからではなく、常に心理学が方法論的に人間を操作

の対象として前提し」[22]、人間の中に見出されるシンボルやフューラーへの憧れ、また起源神話的なものへの憧れについての分析を回避しているからであるとティリッヒは言うのである。そしてティリッヒはこの問題がフロムの方法論にも見出されると言う。

ティリッヒによれば、フロムは「分析的社会心理学の方法と課題について」という論文の中で、「心理分析を経済的物質主義の道具に変えてしまっている。もっとも理想的な動機をも、リビドーの現世的『核』に『引き下げよう』とする彼の意図は、ブルジョア心理分析であり、社会主義のそれではない」[23]とさえ言うのである。しかし他方でティリッヒはこのように今日のドイツ社会主義の不徹底な人間観を批判しながらも、この不適切な社会主義の人間観の認識が、「多方面でマルクス主義と精神分析学の協力関係を生み出している」のだとも述べ、「前に引用した『社会研究雑誌』に掲載された「エーリヒ・フロムの論文やベルンフェルトの論旨を参照して欲しい」とフロムの仕事が目指していることについては評価を与えてもいる。

さてその後のティリッヒの著作におけるフロムからの引用は主としてアメリカ亡命後に書かれた著作の中に見出される。それらは四つに大別されるであろう。第一に、心理学と神学との関連、あるいは心理学の神学への適応についての議論、さらには心理学の神学に対する意義などの諸論文の中に見出されるもの。第二に彼の主著『組織神学』第一巻、第二巻での引用。そして第三には「愛の問題」及び「自己愛」や「自己受容」をめぐる問題で、『存在への勇気』や『愛・力・正義』の中で論じられている諸問題である。最後に第四はティリッヒによるフロムの著作の書評で、これはフロムの『精神分析と宗教』、そして『正気の社会』、さらには本論の最後の手紙に見られるように、フロムの『戦争の心理的要因』に対するコメントのようなものである。

第一の心理学と神学に関する議論はフロムとの対話であるだけではなく、ティリッヒがアメリカの神学市場でもっとも注目された議論であり、ティリッヒはドイツ時代に、ヴィルヘルム帝政期の社会を批判するために援用することを学

んだ精神分析学や心理学の知識をアメリカという移民社会における個人の実存的な問題へとすばやく仕立て直し、ひとつの成功を得たのであった。そこではフロムとの対話のみが重要な役割を果たしているとは言いがたいが、フロムは常に参照されている。

第一の心理学と神学との関する論文におけるフロムについての言及であるが、一九四四年に書かれた「現代思想における疎外と和解」という論文[24]、同年にコロンビア大学でなされた「宗教と健康との関係」というセミナーの記録[25]、一九五一年にベルリンのドイツ政治学専門大学で行われた「諸国民の生におけるユートピアの哲学的意義[26]」という講演、一九五二年にハーバード大学でなされた「自立性と啓示」という講演[27]、一九五五年に出版された『信仰と自由』誌の九巻二五号に掲載された「心理分析、実存主義、そして神学[28]」で、フロムの名前を見出すことができる。しかしいずれもフロムの諸説を分析したり、批判するものではなく、ごく一般的にフロムの概念を引用しているだけである。

第二の主著『組織神学』におけるフロム引用はさらに限定的なものであり、愛やエロスの問題を論じた部分でフロムは引用されている。第一巻では、愛の概念の定義においてフロムの「共生的な愛」という概念が紹介されている。第二巻では、キリスト論が扱われているのであるが、ここでティリッヒはキリストを人間の実存の問いに対する答えとして論じており、フロムは人間の実存状態の分析の中で二度、さらに本質から落ちた状態としての実存よりの回復、あるいは解放についての中で一度引用されているが、フロムの概念がティリッヒのキリスト論や救済論に決定的な影響を与えているということはない。

第三と第四とは深く関係している。ティリッヒは一九五二年に出版した『存在への勇気』の中で、フロムが一九四七年に出版した『人間における自由』での自己愛の問題を引用して「自己愛や利己主義」という用語の使用について疑念を呈している。さらにティリッヒは一九五五年の『正気の社会』の書評でも、フロムの自己愛という概念の使用について批判しており、フロムはその批判に一九五六年の『愛するということ』の中で応えている。

これらの一連の議論の中で問題となったのは「愛」の定義と「自己愛」の解釈である。ティリッヒは長い間フロムの「自己愛」という概念に疑問を感じており、「自己愛」は概念ではなく、シンボルであると述べ、ティリッヒはこの概念使用への批判を繰り返した。

ティリッヒは一九五五年の『正気の社会』の書評中で、フロムの愛の定義を評価し、それをフロムのもっとも偉大な功績のひとつであるとさえ述べている。そのフロムによれば、愛とは自分自身の他のものからの分離と、自分自身の統合であり、その状態を保ったままで、自分以外の他の誰か、あるいは何かと結び付くことである。しかしティリッヒはこのフロムの定義に対して、愛が自己以外のものとの結合であるというのであれば、なぜ自己に対する愛、「自己愛」という言葉が可能であるのか、とフロムに問うのである。

もともとティリッヒは『存在への勇気』の中でも、スピノザを例にあげて「自己愛」という言葉の使用の問題点を指摘しているが、その議論もふまえて、ティリッヒはフロムの愛の概念と自己愛の概念の曖昧さを問題にしたのである。ティリッヒによればそれはネガティヴに言うならば「利己主義」と言えばよいのであるし、正確に言うならば、それは「自己受容」と言うべきだというのである。

ティリッヒは、愛には愛するという主体と愛される客体が必要であり、それが分離されているということが前提とされているが、それが自己の中に、あるいは自己意識の中でも可能か、と問うているのである。しかしフロムはそれに対して心理学的な考え方の根本前提として、人間にとって他者というのは、他の人や他のものを意味するだけではなく、対象となる自己や自分自身の感情や態度も「対象としての他者」であると考えているのである。フロムはこのことを前提として「愛とは自分自身の分離と、自分自身の結合を保ったままの状態で、自分以外の誰か、あるいは何かと結び付くこと」であると主張したのである。

そうであるなら両者の間の根本的な相違は、自己（self）の分離の理解である。ティリッヒもフロムも愛というのは

分離されたものの統一への衝動であるというところまでは一致している。そして自己と自己との分離ということについて、ティリッヒもフロムも考えているのである。しかしティリッヒは自己というのは、「分離不可能」なものであり、孤立した核なのであり、それだからこそ自己というのは「個人」と呼ばれるのである。「個人」はまさに in-dividual であるから、分割できないというのがティリッヒの考えなのである。そうであれば自己の中で起こっていることは、「自己収斂（self-centred）なのであって、元来分割不可能なものが、自己において分離している自己と再結合することなのだとティリッヒは考えているのである。それ故にそれは「自己受容」というべきなのであり、それは本質から文字通り落ちている「実存」の状態にあるものの「再本質化」なのである。

それに対してフロムは自己が愛の対象になると考えるのである。フロムは愛を、二段階にわけて考える。第一には愛とは特定の他者や対象ではなく、世界に対する人間の関係を規定する態度のことであり、人間の能動的力なのであり、これは人間として、誰かや何かを愛するということに先立つものである。第二の愛はこの第一の愛が特定の人間を対象として獲得することなのであり、この場合には他者のみならず、自己を愛するということも可能になると言うのである。この両者の「自己愛」についての微妙な解釈の違いは晩年に至るまで解決されず、この議論は繰り返しなされている。

第四の分類の中で、もうひとつ注目しておかねばならないことは、『正気の社会』や今回本論に収録した『戦争の心理的要因』の書評に見られるように、ティリッヒは彼のアメリカ時代におけるフロムとの関係において、精神分析の方法や自己愛についての分析について議論していただけではなく、フランクフルト時代以来続いていた、社会と歴史の分析における心理学の意義についての議論も一貫して続けられていたということである。

『正気の社会』の書評でのフロム批判のもうひとつのポイントは「疎外」の問題である。ティリッヒは次のように述べている。「フロムの言う疎外は、人間の発展のために必要なものなのであり、それ故に発展の過程で克服されるもの

なのである。『正気の社会』において疎外は克服されるのである。神学は歴史の中でそのような社会を待望するものたちをユートピア主義と呼ぶのである。そしてフロムの『正気の社会』の記述も、そのような呼び名によって裁かれる」[29]と言うのである。

ティリッヒは、ユートピア主義を生み出す社会の不安は心理学的な説明が可能で、精神分析的な見方の社会への適応によってこの病的状況の除去は可能になるというフロムの考えを批判する。それ故に資本主義社会における消費の疎外されたプロセスに関するフロムの記述をティリッヒは理解できるが、それを受け入れることはできないのである。それは実はティリッヒが一九三三年の『社会主義的決断』の中で既に述べていたことでもある。

フロムは人間の健康や健全性を社会の、あるいは共同体の健康の問題と結び付けて考えているが、ティリッヒはこのようなフロムの考え方を問題にしている。ティリッヒが問題にしているのは、フロムの、彼が「正気の社会」と考えるものが実現し、それに人が適応するならば、その人は疎外を克服し、人間は精神的な健康を獲得することができるという考え方である。ティリッヒによればここには第一に「正気の社会」を歴史の中に作り出せるというフロムの楽観主義から来る欠落があると言う。すなわちフロムの考えは「断片的にしか克服され得ない歴史的実存の曖昧さを見過ごしており、さらに共同体の指導者の健康なしには、どのような社会的な健康も不可能であるということを見過ごしている」と言う。それ故にティリッヒはフロムの考えについて、既に引用したように「神学は、歴史の中にそのような社会を期待する者を、ユートピア主義者と呼ぶであろう」と言うのである。これはティリッヒが『社会主義的決断』の中でフロムを批判して以来、保持されている批判の視点でもある。

第二にティリッヒが問題にしているのは、個人の健康や精神分析の方法を社会的な領域にどのように適応できるのか、という問題であろう。個人の健康と正気の社会の形成の関係が不明瞭であり、たとえばフロムは正気の社会というユートピア主義的な理想を提示するのであるが、それは結局「ゴールを示すが、そこに至る道は示さない」という大き

な構造上の欠点がある、とティリッヒは見ているのである。それ故にティリッヒはフロムの「戦争の心理的要因」という論文の批評の中で次のように述べたのである。「このような戦争の要因と原子爆弾による戦争の本質についてのこれらの主張は、特定の精神病理学の曲解によって戦争を説明しようとすることに従事しようとすることを暗黙のうちに否定しており、それがもしこの曲解が人間の普遍的な素質を極端に表現したものだと解釈したとしても、である。人間は確かに本質的に自滅的でサディスティックな傾向を持っているが、(フロム氏はこれらが人間の生来の本質的特長として備わっているということを強く否定する)、このような傾向は戦争状況を実現化するために利用することができる。しかし、それらが戦争を引き起こす原因を作るのだとしたら、それは原因ときっかけの混同である」。

このように見るならば、ティリッヒにおけるフロムとの対話や議論は、一方でアメリカ時代における精神分析の領域での議論があり、他方でフランクフルト時代から続いた批判理論におけるマルクス主義と精神分析学との結合の問題に始まり、社会と歴史哲学における心理分析の適応と妥当性、またその射程についての議論が見出される。すなわちティリッヒとフロムとの関係はフランクフルト時代からアメリカ亡命後までほとんど途切れることなく主題の上でも継続していたことがわかる。また本論で紹介する往復書簡及び関連書簡はこの両者の交流が思想的・主題的なものであったと同時に、個人的・実存的であったことを想起させ、また部分的に実証することができる内容を含んでいると言ってよいであろう。

5. フロムにおけるティリッヒ

晩年には自らを「無神論の神秘主義者」[30]と称している通り、ラビの家系に生まれ、ユダヤ教徒としての教育を受け、

その伝統的価値に生涯親しんでいたにもかかわらず、フロムは神への信仰を持たない無神論者であった。また「一生を通じて、フロムはレッテルを貼られることを頑なに拒んだ。彼が専門家集団や政治団体と密接な関わりあいをもつことはまれだったし、持ったとしてもたいていは短期のものだった」[31]とあるように、彼の人生を概観しても長く親交を持ったグループや個人は少ない。そのような中で、知的活動を行ったほぼ全時期において公私にわたる付き合いを持ったのが神学者ティリッヒであった。

フロムの立場から見て、両者の関係が非常に深い信頼によるものであることは、本書に収録した六番目の手紙から窺い知ることができる。六番目の手紙では、ティリッヒが批評したフロムの論文の題名がこの段階では「戦争の倫理的要因」であったことがわかる。ティリッヒはこのタイトルに問題を感じたのである。すなわち「フロム博士の論文に対する、私の基本的な批評は『戦争の心理的要因』というタイトルそのものに向けられる」と述べている。しかしこのフロムの論文は後に「人類の中の戦争」に改題されて出版されたのである。[32]この改題がティリッヒの指摘とまるで無関係であるとは考えられず、両者の間には、表面的な交流のみならず、知的交流においても深い信頼関係があったと言ってよいだろう。それ故にフロムの立場から見たティリッヒとの知的交流をいま一度整理してみたい。

「そもそも思想家の仕事を年代別に区分することは誤解を招く恐れがあるが」と前置きした上で、ダニエル・バーストンはフロムを同時代人の間で位置づけ、また彼の研究の文脈をたどる目的で、フロムの仕事の年代区分を行っている。バーストンによれば、文体と主題の変化とフロムの著作に対する読者の反応を基に、初期の仕事を「フロイト－マルクス主義期」（一九二九～一九三五年）、「宗教的・神学的主題への関心が高まる時期」（一九三六～一九六〇年）を中期とし、最後の時期を「ある種のフロイト回帰と、フロイトの理論の転調を試みから始まり、学問的価値からすればまったく不必要な繰り返しを行った時期」（一九六〇～一九八〇年）としている。[33]前章において、ドイツ時代、つまりフロムの初期の仕事から両者の関係が始まったことが説明されているが、フロムとティリッヒとの関係がもっとも密で

あったのは、アメリカ時代からメキシコ時代、つまりフロムの仕事の中期であったと言ってよい。

両者の関係の事実的側面については前章に詳しいので、ここでは二人が実際に会って活発な議論を行った場となったニューヨーク・サイコロジーグループの活動と、そのグループで、ティリッヒとフロムが特に討論したテーマについて焦点をあててみたい。

フロムとティリッヒが直接議論をしたニューヨーク・サイコロジーグループは、神学と心理学の関係について議論をする目的でさまざまな分野の専門家が集まった研究会である。一九四一年から一九四五年の約四年間にわたり、合計二九回のミーティングが開かれた。毎月一回、金曜の夜に、持ち回りというかたちでメンバーの自宅を会場にしていた。ミーティングの形式は一人がプレゼンテーションを行い、それについて議論を加えていくというものであった。メンバーはフロムとティリッヒの他にロロ・メイ、スワード・ヒルトナー、デービッド・ロバーツ、ルース・ベネディクト、カール・ロジャースの他数名が参加。この会は当時、各分野の一線で活躍していたメンバーが参加していたにもかかわらず、その活動についてはあまり知られていないが、実は速記者によって議論がほぼ完全に記録されている。これまで出版されたことはなかったが、クーパーによって特にティリッヒと、非公式ではあるがグループのリーダー的役割であったフロムに焦点をあてた部分が明らかにされている。[34] フロムとティリッヒは、このグループの中心メンバーであり、時に二人の討議が白熱したためにミーティングを終えることが困難であることもあったという。

実際の議論の内容であるが、一年ごとにテーマを決めるかたちで四つの主題を扱っている。一年目は「信仰の心理について」、二年目は「愛の心理について」、三年目は「良心と倫理の心理について」、四年目は「救済の心理について」であり、記録によれば特に一年目と二年目のテーマにおいてはティリッヒとフロムが中心になり議論を進めている。[35]

特にフロムは一年目のミーティングに一度も欠席することなく、他のメンバーの誰よりもさまざまな情報や議論の材料をグループに提供した。ティリッヒもまた、フロムとは違った側面からコメントをしている。この年、フロムは『自

由からの逃走』を出版したばかりで、この本の内容を反映したコメントをしばしばしている。

特に人間の特性について議論されたが、ティリッヒによれば、これはフロムの言う「人間の可能性」を明らかに超えたものであり、その究極の領域は必ずしも人間の攻撃性に関連しているわけではなく、人間はその特性に「属している」にもかかわらず、それから遠ざけられている。

また興味深いのは、「信仰の心理」について議論をするなかで、フロムはティリッヒに対して「神学的な言葉に忠実ではない」と指摘し、ティリッヒに西洋の伝統と矛盾しない、神の「存在論」や神の「脱人格化」についてまとめるよう求めていることである。

二年目には、その年に刊行されたフロムの『愛するということ』をテキストにしてミーティングが進められた。議論のポイントは、人間から人間への愛と人間から神、神から人間への愛は同じか、人間と人間との間の愛は確認できるが、神から人間への愛は証明できず、果たして両者の愛は同じ性質のものと言えるかという点、「自己愛」という言葉の適否について、の二点であった。

自己愛については、これまでも議論されてきたにもかかわらず両者が生存中には解決できなかったテーマである。著書や書評など活字となった両者のやりとりに加え、このミーティングでの直接的な議論を考察することは、両者の意見の一致や、最後までお互いの主張を受け入れることができなかった相違点をより詳細に知る手がかりになるのではあるまいか。

テキストとなった『愛するということ』の脚注で、フロムはティリッヒの批判に以下のように答えている。[36]「パウル・ティリッヒは『パストラルサイコロジー』誌一九五五年、九月号で拙著『正気の社会』の書評した際に、『自己愛』などという曖昧な言葉を使うのはやめて、『自然な自己肯定』とか『逆説的な自己受容』といった表現を用いたらどうかと提案した。この提案の趣旨はよくわかるが、次のような理由で賛成しかねる。『自己愛』という用語のほうが、自己

愛に含まれる逆説的な要素がよくあらわれている。自分自身を含め、あらゆる対象にたいする愛がありうるのだという事実をよく表している。また、ここでもちいているような意味での『自己愛』という言葉には歴史があるということも忘れてはならない。『汝のごとく汝の隣人を愛せ』という聖書の命令は自己愛について語っているし（以下略）」。

しかし、このミーティングにおいてもティリッヒはフロムの「自己愛」という言葉の使い方にさらに疑問を投げかけるのである。フロムは彼の最初のプレゼンテーションで、フロイト的なナルシシズムとして自己愛を強く否定した。フロイトは、自己を愛するとナルシシズムに陥り、自己を愛すると他者を愛する愛は残らないとしているからである。つまり自己愛が増えると他者への愛が減るというように、両者は互いに排他的であるという理論である。逆に、フロムは自己を愛することは、他者を愛する前提となるものであることを強調し、自己愛を利己愛（利己主義）と混同することから自己愛の誤った解釈が生ずると説明している。

これに対しティリッヒは、フロイトとは違い、自己を愛すると他者を愛することができないという点についてはさほど憂慮しておらず、端的に「自己を愛することは不可能である」と考えているのである。自己愛を比喩的に使う場合、自己愛よりも自己肯定や自己受容という言葉を使うほうがよいと主張している。その理由のひとつに、愛は常に忘我または自己超越を伴う性質を持っているが、自己愛はこのような超越をもたらさないことをあげている。

フロムの愛についての定義をティリッヒは基本的に認めている。愛の定義における両者の互いへの影響を確認するのは困難であるが、フロムの「愛とは自分自身の分離と自分自身の統合を保ったままの状態で、自分以外の誰かないし何かと結び付くこと」、そしてティリッヒの「愛とは分離されたものを統一へと駆り立てる衝動である」という定義にそれほど大きな齟齬はない。しかし、愛が自己以外との結び付きであるとするならば、なぜ「自己（に対する）愛」と言うことができるのか、とティリッヒは指摘し、フロムの愛と自己愛の定義の関係に理論的な矛盾があるとしている。それではフロムの考える「自己愛」の対象とは何であろうか。『愛するということ』の中でフロムは、利己的な人間は実

際は自分を愛せない、「真の自己」を愛していないと書き、「真の自己」を愛することを「自己愛」と定義している。では「真の自己」とは何であろうか。

従来の精神分析の理論では、リビドーのベクトルを「自己愛から対象愛」へと転換することによって社会性や道徳心を獲得し、自我を成長させることができると考えられていたが、フロムは明らかにこの点を否定し、自己も他者も同時に人間の愛の対象となりうると明言している。フロイト的に言うならば、ナルシシズムに陶酔しきっている状態は他者へ愛のベクトルが向くことはなく、それは病理的な自己肥大を起こすような幼稚な精神状態である。その後、「自己愛を幼稚」「対象愛を成熟」と優劣をつけることはできず、自己愛の継続的な充足（フロムによるところの「真の自己」による健全な自己愛）は、人間の健全な発達や精神的安定に不可欠であると考えられるようになった。今日、健全な自己愛とは、対象化した自己と、自我の統合によって育まれるとされていることから考えると、フロムの言う「自己愛」は、ティリッヒの言う「自己受容」「自己肯定」が行われた先に獲得できるものと言えるのではないだろうか。

ティリッヒとフロムが、本論に収録した個人的な手紙のやりとりからもわかるように、お互いの健康を思いやったり、出版を喜んだりする関係を持ち続ける間柄に至ったのは、文字通り顔を突き合わせて時間も気にせず議論を戦わせることができたこのニューヨーク・サイコロジーグループでの真剣な討論が大きな意味を持っていたに違いない。「無神論者」であるフロムが実は強い信仰心と宗教や神への興味を持ち続けたこと、晩年のティリッヒの興味や思想が心理学や精神分析学に重なる領域に向いたことなどを考えるならば、両者の互いへの影響は決して小さいものではなかったと推測できよう。特に両者の直接的な交流を追うと、彼らの人間理解への強い探究心と妥協しない姿勢が垣間見え、思想や学術的見解の差異を超えて、お互いを尊敬し合う関係を構築していたことが明らかになる。

6. 書簡について

ティリッヒとフロムとの間の現存する書簡はそれほど多くはなく、またこれまでほとんど知られていないし、公にされてもいない。それ故に今後さらなる調査が継続される必要がある。伝記も書いた著名なフロム研究者であるライナー・フンクもまた情報を持っていないということであった。また近年ティリッヒについての優れた研究を発表し続けているアルフ・クリストファーセンの答えも同じであった。竹渕の調査によれば、ティリッヒの資料を保存するハーバード大学のアンドーヴァー神学図書館、ニューヨーク公共図書館にはフロムとティリッヒの間の書簡は本論に収録されたもののみが所蔵されている。

第一の手紙は、エーリヒ・フロムが所蔵していたパウル・ティリッヒからの連絡書簡で、一九四二年三月五日付けである。これはティリッヒの自宅で定期的に行われていた研究会の案内の一部である。

第二の手紙は、ヘレン・L・ノイマンからパウル・ティリッヒへの手紙で、一九四三年五月六日付けである。この書簡はライナー・フンクを通して深井に新たに送られてきたものである。これはアメリカに亡命したドイツ人たちの支援組織で、ドイツでの職業、とりわけ知的キャリアをアメリカで生かすために、相互にそのキャリアを保証し合う仕組みである。ティリッヒはフロムの紹介で、アルフレッド・シードマン博士についての履歴情報を書いたのであった。その礼状である。

第三と第四の手紙は、メキシコにわたったフロムからティリッヒへの手紙で、完全に個人的な内容である。日付は、前者が一九六一年一二月二六日付けで、後者は一九六二年一月二三日付けである。

第五と第六の手紙は、フロムの『戦争の心理的要因』の編集者ゴードン・クリスチャンセンからティリッヒへの手紙とティリッヒからの返事である。クリスチャンセンはフロムの論文に、ティリッヒの批判的応答を求めたが、ティリッヒはそれに快く応え、その短い批判的評論を付した手紙を送ったのであった。日付は前者が一九六三年一月一七日付けで、後者は同年二月一六日である。

第一から第四までの書簡はハーバード大学アンドーヴァー神学図書館の「ティリッヒ文書」に、第五と第六とはニューヨーク公共図書館に保存されている。

第二部　エーリヒ・フロム＝パウル・ティリッヒ往復書簡及び関連書簡の翻訳

（一）エーリヒ・フロムが所蔵していたパウル・ティリッヒからの連絡書簡　一九四二年三月五日【英文】

お知らせ

コロンビア〔大学〕・ユニオン〔神学校〕哲学ブループの皆様

次回の会合は、三月一一日水曜日午後＊＊[37]時から、クレアモント通り九九番地のティリッヒ教授のアパートで開催されます。J・ランドール教授が「宗教的状況の形而上学的癒し」[38]というペーパーを朗読してくださることになってい

ます。

出席できない方は、どうぞ〔ハンナ・〕ティリッヒ夫人までお知らせください。

パウル・ティリッヒ

一九四二年三月五日

（二）ヘレン・L・ノイマンからパウル・ティリッヒへの手紙　一九四三年五月六日【英文】

全国亡命者支援協会
中央通り一三九
ニューヨーク市

一九四三年五月六日

パウル・ティリッヒ博士
ユニオン神学校
ブロードウェイ一二〇番通り
ニューヨーク、NY

ティリッヒ博士へ

専門的研究分野に関してあなたからの内容証明が必要であったアルフレッド・シードマン博士についての情報をお寄せくださり、心より感謝申し上げます。

彼は一九三八年から合衆国におりますが、彼が心理学の研究者としてどのようなことができるのか、また彼が関心を持っている関連分野が何であるのか、ということについては、私たちはほとんど何も具体的な資料を持ち合わせておりませんでした。

もし私たちが〔あなたの推薦によって〕、最終的には彼が経済的に自立できるような仕事を、規程に従ってシードマン博士に提供することで、彼を支援することができれば、それは彼にとっては大きな喜びでありましょう。

あなたの〔シードマン博士に対する〕ご支援が私たちに確信を与えて下さったのであり、私たちの活動を支援して下さったのです。もちろんあなたが私たちのためになして下さった全ての報告について、私たちは守秘義務を順守いたします。

敬具

ヘレン・L・ニューマン

人事課

HLN/mf

(三) エーリヒ・フロムからパウル・ティリッヒへの手紙　一九六一年一二月二六日【英文】

エーリヒ・フロム
ゴンザレス通り一五番地
メキシコ市　一二　D・F
電話番号　二三―〇四―一九
一九六一年一二月二六日

パウル・ティリッヒ博士
チャウンシー通り一六
ケンブリッジ八　マサチューセッツ

パウル・ティリッヒへ

あなたの体調が優れず、憩室炎をわずらっておられるということを、ジム〔ジェームズ〕・アダムスよりたった今聞きました。

私自身、その憩室炎に時々みまわれるので、それがどのように不快で、そして局部的症状とは別に、気持ちを滅入ら

せ、大変な疲労をともなうものであることをよく知っています。

あなたの一日も早い快復を願っています。またあなたとハンナ・アニスとに[39]私から心より新年の挨拶を送ります。

敬具

エーリヒ・フロム

(四) エーリヒ・フロムからパウル・ティリッヒへの手紙　一九六二年一月二三日【独文】

エーリヒ・フロム
ゴンザレス通り一五番地
メキシコ市　一二　D・F
電話番号　二三―〇四―一九

一九六二年一月二三日

パウル・ティリッヒ博士
ハーバード大学神学専門大学院
フランシス通り四五

ケンブリッジ三八　マサチューセッツ

パウルス、

あなたからの回覧文を今受け取りました。どうもありがとう。明日出発するので、今はごく短くお返事します。あなたの新しい書物の完成と、その他のさまざまな計画に対して、[40] 心から幸運を祈ります。

私たちが長い間会えないでいることを大変寂しく思っています。そう遠くない将来にお会いできる機会が来ることを願っています。

私と私の妻から、心を込めて。

あなたの

エーリヒ・フロム

（五）ゴードン・クリスチャンセンからパウル・ティリッヒへの手紙　一九六三年一月一七日【英文】

一九六三年一月一七日

パウル・ティリッヒ博士

ハーバード神学専門大学院
ケンブリッジ三八　マサチューセッツ

ティリッヒ博士へ

同封したエーリヒ・フロム博士の原稿『戦争の心理的要因』に対して今回あなたにコメントを書いて頂きたくこの手紙を書いています。アメリカン・フレンズ・サービス・コミティーは、この論文を「戦争抑止を超えて」という、核抑止による安全を追求する国家政策に、希望ある新しい手段の提案と批評を行うことを意図した研究のシリーズのひとつとして出版しようと計画しています。

このシリーズの初期のパンフレットに、私たちが専門家と著者が論文について、自由で批判的議論ができる小研究会を催した〔ことが書かれています〕。その小研究会であがったコメントは記録されており、要点もこの論文のあとがき部分に記載され出版されます。このシリーズの最新出版物、ワスコー氏（平和研究所）の『故意ではない戦争』のコピーを同封します。解説はこのパンフレットの三八ページから掲載されています。

フロム博士の論文については、私たちは数人に論評のコメントを書いてもらい、フロム博士にコメントに対する返答を書いてもらうように彼をご招待し、議論の体裁を整える計画を立てています。そしてこれまでの論文のように、論評は論文の付録として出版されます。フロム博士の論文にコメントを書くよう依頼されたのは、ラインホールド・ニーバー教授、トーマス・マートン牧師、ジュローム・フランク博士、ピティリム・ソロキン博士、ジュールズ・マッサーマン博士、ブルーノ・ベテルハイム博士、そしてロイ・メーニンガー博士です。

私たちの出版スケジュールをかなえるためには、あなたのコメントを一九六三年二月一五日までに受け取る必要があ

ります。この日程までに提出いただければ、他の関係者の論評とフロム博士からの返答のコメントを書いてもらい、あなたにお送りし、そしてもし必要であれば短く書き足していただき、出版前に最終的な承認を得ることができます。

私たちはあなたの見解と論評がこの出版物に含まれることを心から願っています。この論文におけるフロム博士のこの問題提起は非常に重要なことで、必ずや多くの議論を引き起こすことになると確信しています。この論文にあなたがご参加くださることが、私たちの研究シリーズの価値を高めることになるでしょう。

敬具

ゴードン・クリスチャンセン

平和教育部門代表

GC:jp

同封物　二

（六）パウル・ティリッヒからゴードン・クリスチャンセンへの手紙　一九六三年二月一六日【英文】[41]

一九六三年二月一六日

ゴードン・クリスチャンセンへ

平和教育研究部門代表
アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティー
ノースフィフティーン通り一六〇
フィラデルフィア二　ペンシルベニア

クリスチャンセンへ

フロム博士のこの論文に対する、私の基本的な批評は『戦争の心理的要因』というタイトルそのものに向けられる。戦争は、いくつかの権力組織同士、すなわち歴史の担い手たちと、その原動力の遭遇によって引き起こされる。これらの衝突は、それぞれの権力組織がひとつの共通の核を見つけ包括的な一致をもたない限り避けることはできない。これが歴史的な可能性として内在しているかどうかについては未だ解決されていない。核戦争は、大きな一致を作りだせないという点において戦争の意味に矛盾し、歴史的な動きの中心におかれた人々を滅ぼす。したがって、戦争という状態におかれたとしたら、それに関わる全ての人が非公式または公式な同意であれ、それを使用することを避けようとすることは想像できるだろう。そして、それは誰もそのような戦争を始めるべきではないという明らかな倫理的要求で、それはいわば戦争ではなく大災害にすぎない。このような戦争の要因と原子爆弾による戦争の本質についてのこれらの主張は、特定の精神病理学の曲解によって戦争を説明しようとすることに従事しようとすることを暗黙のうちに否定しており、それがもしこの曲解が人間の普遍的な素質を極端に表現したものだと解釈したとしても、である。人間は確かに本質的に自滅的でサディスティックな傾向を持っているが、（フロム氏はこれらが人間の生来の本質的特長として備わっているということを強く否定する）、このような傾向は戦争状況を実現化するために利用することができる。しか

し、それらが戦争を引き起こす原因を作るのだとしたら、それは原因ときっかけの混同である。

敬具

パウル・ティリッヒ

注

（1）本論はフロムとティリッヒの知的伝記に関する研究である。ティリッヒとフロムとの間で交わされた書簡、及び関連する書簡の調査は竹渕が担当し、竹渕がライナー・フンクやハーバード大学アンドーヴァー神学図書館の「ティリッヒ関連文書」、ニューヨーク公共図書館に問い合わせて発見したものである。ただし二番目の書簡だけはライナー・フンクから深井に直接送られてきたもので、今回新たに公開されるものである。解説部分は、3を深井が、4は竹渕が担当した。1と2ではティリッヒに関する部分は深井が、フロムに関する部分は竹渕が担当している。書簡の翻訳は全て竹渕が行った。この研究はマック・グーテマン財団の二〇〇九年度・二〇一〇年度のドイツ＝日本文化交流基金の助成に基づく研究の一部である。これらの書館は関係者の了解のもとに翻訳、紹介される。〔　〕内は翻訳者による補語である。

（2）この点についての包括的、概説的な研究として、Karin Grau, *Healing Power—Ansätze zu einer Theologie der Heilung im Werk Paul Tillichs* (＝Tillich-Studien 4), Münster 1999, 109, 130ff. を参照のこと。

（3）Gerhard P. Knápp, *The Art of Living. Erich Fromm's Life and Works*, New York and Frankfurt a.M. 1989. 翻訳、ゲルハルト・P・ナップ（滝沢正樹・木下一哉訳）『評伝エーリッヒ・フロム』新評論、一九九四、六九頁

（4）フロムの妻ヘニーはナチスから逃れる際に脊髄を痛めてしまい、その後遺症に悩まされていた。リューマチ性の関節炎に

治療にさまざまな医学的療法の効き目がないとわかった時に、彼らは勧められてメキシコの放射線温泉に湯治にでかけたのである。しかしヘニーの病気はついに治らず、メキシコで一九五二年に亡くなっている（Rainer Funk, *Erich Fromm*, 1983, 176）。

（5）もちろんメキシコへの移住はフロムがアメリカの仕事を放棄したことを意味してはいない。フロムは年に四ヵ月はアメリカに戻り、アメリカの各地の大学で教え一九五七年から六一年まではミシガン州立大学、一九六二年からはニューヨーク大学の教授であった。

（6）この時代のティリッヒについてはPeter Haigis, Theologische Wegmarken in einem wilden Gelände. Biographisches und Werkbiographisches aus den Jahren 1919-1925, in: Ilnona Nord, Yorick Spiegel (hrsg.), *SPURENSUCHE Lebens- und Denkwege Paul Tillichs*（＝Tillich-Studien Bd. 5), 2001, 105-120

（7）E. Fromm. Das jüdische Gesetz. Ein Beitrag zur Soziologie des Diasporajudentums, Diss. Heidelberg, 1925

（8）G. Scholem, *Vom Berlin nach Jerusalem*, Frankfurt a. M. 1978, 197ff

（9）Vgl. G. Scholem, aaO.; Rundbrief von Paul Tillich, May 19, 1962

（10）Paul Tillich Rundbriefe, May 19, 1962

（11）Tillich-Archiv 所蔵の講義録及び登録者名簿による。

（12）G. Booth, Paul Tillich and Pastoral Psychology, in: *Pastoral Psychology*, 19（1968), 183f.

（13）ティリッヒ自身も、また他の伝記作家もマックス・シェーラーの後任だと述べ、また周囲の人々もそう考えていたが正確にはそうではない。シェーラーは確かにハンス・コルネリウスの後任に任命されたのであるが、一九二八年五月一九日に突然の心臓発作のために死去し、彼は一度も講義を行わないまま、この講座の教授は再び空席となった。それ故に大学当直はコルネリウスの後任を再び探すことになり、ティリッヒがそのポストを得たのである。

（14）ハーバード大学アンドーヴァー神学図書館「ティリッヒ文庫」

（15）Martin Jay, Permanent Exiles. *Essays on the Intellectual Migration from Germany to America*, New York 1986, 50

（16）Rainer Funk, *Erich Fromm*, 1983

（17）René Tillich, My Father, Paul Tillich. Autobiographische Notizen, in: Ilnona Nord, Yorick Spiegel (hrsg.), aaO. 9-24

(18) Wilhelm and Marion Pauck, PAUL TILLICH his life & Thought, Vol.1: Life, New York 1967, 74.（ヴィルヘルム・パウク＆マリオン・パウク共著（田丸徳善訳）『パウル・ティリッヒ１生涯』ヨルダン社、一九七九
(19) Vgl. Erich Fromm, Über Methode und Aufgabe einer analytischen Sozialpsychologie, in: Zeitschrift für Sozialforschung, Jg. 1 (1932), Heft 1/2
(20) Paul Tillich, Die sozialistische Entscheidung, (＝Schriftenreihe der Neuen Blätter für den Sozialismus, Heft 2), Potsdam 1933, jetzt: Paul Tillich Gesammelte Werke Bd. II, Stuttgart 1962, 289, 339
(21) Paul Tillich, Die sozialistische Entscheidung, Potsdam 1933, (＝in: Paul Tillich Gesammelte Werke Bd. II, Stuttgart 1962) 289
(22) aaO. 339
(23) aaO. 339
(24) Paul Tillich, Estrangement and Reconciliation in Modern Thought, in: *Review of Religion*, 9 (1944) Heft 1
(25) Paul Tillich, The Relation of Religion and Health. Historical Considerations and Theoretical Questions, in: *Review of Religion*, 10 (1946)
(26) Paul Tillich, Die politische Bedeutung der Utopie im Leben der Völker. In: Schriftenreihe der Deutschen Hochschule für Politik, Berlin 1953
(27) Authority and Revelation, in: *Official Register of Harvard University* 49 (1952), 27-38
(28) Paul Tillich, Psychoanalysis, Existentialism and Theology, in: *Faith and Freedom*, 9 (1955) 1-11
(29) Paul Tillich, Pastoral Psychology, 6 (1955), 217
(30) 前掲、ナップ『評伝エーリッヒフロム』、一六頁
(31) Daniel Burston, *The Legacy of Erich Fromm*, Massachusetts, 1991. ダニエル・バーストン（佐野哲郎・佐野五郎訳）『フロムの遺産』、紀伊国屋書店、一九九六、五四頁
(32) Paul Tillich, Response to Comments on War Within Man, The Literary Estate of Erich Fromm, 2004
(33) 前掲、バーストン『フロムの遺産』、二〇―二二頁
(34) Terry Cooper, Paul Tillich and the New York Psychology Group 1941-45, *Bulletin of the North American Paul Tillich Society*,

Vol.31-No2, Spring, 2005

(35) Terry Cooper, *Paul Tillich and Psychology*, Mercer university press, 2006

(36) Erich Fromm, *The Art of Loving*, New York, 1956. E・フロム（鈴木晶訳）、『愛するということ』新訳版、紀伊国屋書店、一九九一、二〇〇頁

(37) 手紙の中央に何らかの原因によるシミがあり、判読不可能である。

(38) 判読が困難であり、翻訳は推測による。

(39) 原文にはand Hanna Annis' and myとあるが、後者のandはタイプミスである。

(40) これはドイツで刊行が開始されたティリッヒの著作全集の新しい巻の発行と他の巻の出版計画のことを指している。

(41) 原文にはいくつかタイプミスがあり、実際に出版された文章では修正や変更がされている箇所が認められる。箇所によっては単語の意味が変わるところがあるが、ここでは原文の通りに訳した。以下に原文と出版された単語（括弧内）を示す。cristcism (criticism), title it serves (title! it says), powerstructures (power structures), it's (its), common (common), clear (cleat), catastrophy (catastrophe), implicitely (implicitly), attend (attempt), universaly (universally), essentiel (essential), actualised（修正なし）